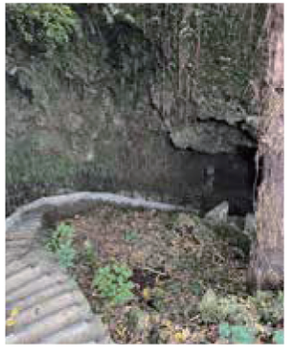
鎮魂之碑

糸洲の壕



学習環境整備

献花台・解説案内板設置

整備前

整備後

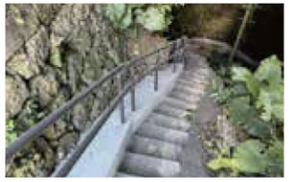
看板立替

整備前

整備後

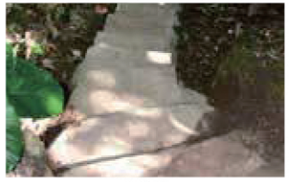
壕入口階段(手すり取付)

整備前



整備後

壕入口階段(滑り止め設置)



整備前

整備後

交通案内

- 「那覇空港」から　車で約30分
- 「豊見城I.C.」から　車で約20分
- 「ひめゆりの塔」から　車で約5分
- 「平和祈念公園」から　車で約10分

基本情報

住所：沖縄県糸満市字伊敷前原189番1

【糸洲の壕見学時の注意事項 】

●壕内は川が流れています。
壕の奥に入る場合は、十分な装備のもと専門家と一緒に行動するようにしてください。

●雨天時は大変危険であるため、壕の中には絶対に入らないでください。

【お問い合わせ】
佐久市教育委員会　文化振興課文化振興係
住所：長野県佐久市中込3056
電話：0267-62-5535

語り継ぐ、平和への願い。

糸洲の壕
(ウッカーガマ)

小池勇助軍医と積徳学徒隊の歩み

はじめに

長野県佐久市出身の小池勇助軍医は、沖縄戦末期、沖縄県糸満市にある糸洲の壕において、積徳学徒隊に生還を説き、自決しました。

佐久市は、糸洲の壕を「平和学習」の場として整備し、命の尊さを学ぶ環境づくりを推進しています。

佐久市・佐久市教育委員会

糸洲の壕が伝える平和への願い

糸洲の壕（ウッカーガマ）は、沖縄戦時に「積徳学徒隊」（後の「ふじ学徒隊」）が看護活動を行った第2野戦病院の跡地です。

昭和20（1945）年2月、長野県佐久市出身の小池勇助隊長のもと、25名の女子学徒が動員されました。首里陥落後の5月下旬、部隊は住民の避難場所であったこの壕へ撤退し、学徒たちは暗闇と激化する攻撃の中で過酷な業務に従事しました。

6月下旬、日本軍の組織的戦闘が終了し各地で悲劇が相次ぐ中、小池隊長は学徒らに対し「必ず生き残って家族のもとに帰りなさい。絶対に死んではならない。戦争の悲惨さをみんなに語り継いでくれ」と訓示して解散させた後、自決し、54歳の生涯を閉じました。隊長の教えを守り、戦火を潜り抜けた学徒の生存率は極めて高く、沖縄戦における稀な事例とされています。

佐久市では凄惨な歴史を刻むこの壕を、命の尊さを未来へ伝える平和学習の場として整備しました。現代の私たちにはその記憶を継承していく役割が託されています。

小池勇助軍医

―命のバトンを繋いだ一人の医師の歩み―

明治42年	旧制野沢中学校(現・野沢北高等学校)第3回卒業 ※在学中、伯父阿部棄太のもとで医学を習い覚える。
大正3年	金沢医学専門学校卒業後、歩兵第7連隊に入営。 後、陸軍軍医学校で眼科を専攻。 眼科の世界的権威者 石原忍先生に師事。
大正14年	依願予備役に編入、軍医となる。 東京帝国大学眼科教室で研究生活を送る。
昭和3年	佐久鉄道の中込駅前で小池眼科医院を開業。
昭和12年8月～昭和15年1月	日中戦争に出征
昭和16年8月～昭和18年1月	満州に出征
昭和19年8月～	沖縄に出征
昭和20年6月	沖縄県糸洲の壕（ウッカーガマ）にて、 辞世の詩を残し、青酸カリを飲み自決。54歳。

小池軍医 辞世の詩

南の孤島の果てまで守りきて
御楯となりゆく吾を
沖のかもめの翼にのせて
黒潮の彼方の吾妹に告げん

小池勇助軍医肖像

「学徒隊生存者の手記」の一文

（前略）

入口からガス弾が投げこまれ、「ガス！ガス！」の叫びとともに、鼻やのどがひりひり痛み、咳き込むなど大変でしたが、防毒マスクも無いので、急いで土手の角にあるカボチャの形をした泉へかけ寄り、タオルや衣服を浸して頭へ被り、暫くじっとガスが去るのを待っていました。

（中略）

それから暫くして、小池隊長のところへ集められ「今までご苦労様でした。君たちはこれから国頭のほうへ突破して親元へ帰りなさい。是非生き残って、若い世代にこんな悲惨な戦争は二度と起こしてはいけないと語り継いでくれ。」と諭されました。その後少量の非常食がひとりひとりに配られ、隊長と握手して別れを惜しみました。

小池隊長はそのあと、自決なさったようです。

（後略）

積徳学徒看護隊
『野戦病院
血と涙の記録』より引用

〈沖縄戦 概要〉

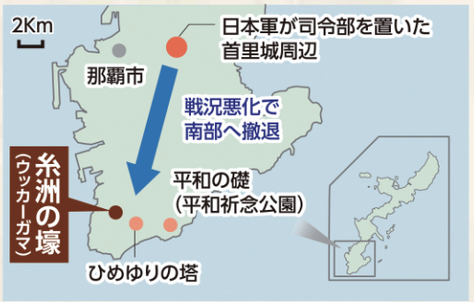
住民を巻き込んだ凄惨な地上戦

太平洋戦争末期の沖縄戦は、日本軍が本土防衛の最後の拠点として沖縄を位置づけ、昭和19（1944）年3月に第32軍を創設したことに始まります。

同年10月の十・十空襲を経て、米軍は昭和20（1945）年4月1日、1,500隻近い艦船と約54万人の兵員を投入して沖縄本島への上陸を開始しました。約3～5ヶ月に及んだ地上戦は、県民を巻き込んだ極めて凄惨なものとなりました。

6月23日に司令官の牛島満らが自決したことで、日本軍による組織的な戦闘は終結したとされていますが、その後も各地で局地的な戦闘が続きました。南西諸島守備軍が正式に降伏文書に調印したのは、終戦後の9月7日のことです。

この一連の戦闘による犠牲者は、沖縄の住民9万4000人（県民の4人に1人）を含む計20万人以上にのぼるといわれています。



〈沖縄戦 年表〉

昭和19（1944）年

3月22日	南西諸島を防衛する陸軍第32軍（牛島満司令官）を創設
8月22日	疎開学童を乗せた対馬丸、米潜水艦により沈没（対馬丸事件）
10月10日	米軍艦載機沖縄を空襲、県都那覇市の90%焼失（10・10空襲）

昭和20（1945）年

1月20日	米軍、南西諸島を攻撃
3月26日	米軍、慶良間諸島に上陸
4月 1日	米軍、沖縄本島に上陸、本格的な地上戦開始
6日	菊水作戦（特攻攻撃）開始（～6月22日）
5月22日	司令部、南部への撤退を決定
31日	米軍、首里を占領
6月23日	牛島満司令官・長勇参謀長自決、日本守備隊の組織的戦闘終結
7月 2日	米軍、沖縄戦終了を宣言
9月 7日	嘉手納の米琉球兵団で降伏文書調印、沖縄戦の最終的な終結